

都市デザインその表現の系譜に関する研究

—戦後「新建築」誌にみられる図表現についての考察—

Study on method for visually communicating design concepts in Urban Design

- Focus on Illustrations in "Shin-Kenchiku" Journal after World War -

06130 田中大朗

This study traces the descent of urban design representations in postwar Japan, in order to clarify how the designers have elaborated the cities by reviewing the projects appeared in "Shin-Kenchiku" which is one of the typical architectural journals dealing with physical spaces in Japan. It is found that the representation method has been diversified and it has included many scales and uses.

0. 研究の背景と目的

0-1. 研究の背景

都市ビジョンなき時代

近年都心部において超高層マンションの建設ラッシュや大規模再開発など、次々と大規模な都市更新が進められ、都市の姿は大きく変わろうとしている。このような様相を見せているこの時にこそ、都市を如何なる方向へつくっていくのかという都市ビジョンが何より必要となる。計画者や住民、行政などの間で将来の都市像を共有することは重要である。しかし現在、都市の将来像の共有はできていないのではないだろうか。都市に対していかなるビジョンを描くかという問題は大きな転換点を迎えている。都市デザインの大きな役割（あるいは使命と言い換えてもよい）の一つとして、都市像の共有や都市のビジョンを描くことがあるが、都市ビジョンを描く都市デザインは現在大きな転換期にある。

表現技術の多様化

またコンピューター技術の発達により、コンピューターを利用して、建築や都市を設計する事が一般化してきたことで、そのデザインの表現技術には大きな変化みられる。表現は計画者の計画意図を示すだけではなく、計画を他者と共同で進めたり、利用者である住民に対する説明時にも、その将来像を共有する時にも重要な役割を果たす。このような都市デザインにおける「表現」も大きな転換期にある。

そこで都市に如何なるビジョンを描くかを「都市デザインの表現」という視点から検討することが必要である。

0-2. 研究の目的

そこで本研究の目的は、1. 戦後日本において、どのような都市デザインの表現を介して都市が構想されてきたかを把握すること。2. 都市デザインの表現手法の多様性を把握すること。3. 戦後日本の都市デザインの系譜を「表現」という観点からとらえなおすこと。4. そこから、都市デザインの表現（都市ビジョンの描き方）のあるべき姿について考察を行うこと、である。

0-3. 研究の方法

既往研究・文献から「都市デザインの表現」という考え方について論ずる。そして、具体的に戦後以後の日本における都市デザインの表現の現れを見るため、ケーススタディとして雑誌「新建築」に掲載された計画面・作品を対象として取り上げ、検証する。

0-4. 論文の構成

本論文の構成は、まず序章で本論の背景・目的・方法・構成を示す。次に第1章では、本論文の対象とする「都市デザインの表現」についての考え方を整理し、また「都

市デザインの系譜」及び「新建築」に関する既往研究の分析を行うことで本論の位置づけを行う。続いて第2章では、本論文のケーススタディの対象とする「新建築」誌について、その概要、内容的特徴・場所・社会状況、新建築の取り上げ方の特徴を整理する。そして、第3章では、新建築に見られる図表現から都市デザインの表現要素を抽出する。第4章において、抽出された要素ごとに事例をもとに具体的に分析・検討を加える。最後に終章においてまとめと考察を行う。

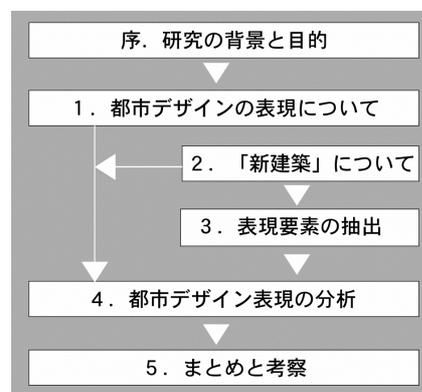


図1：論文の構成

1. 都市デザインの表現について

1-1. 都市デザインの表現

都市デザインとは

「都市デザイン」というと、様々な解釈が可能である。広大な新都市の計画だけではなく、様々な機能を織り交ぜた大規模再開発、小さな単位では集合住宅なども集まって住むという意味において都市デザインと言えるだろう。景観条例やデザインガイドラインなどの法的規制、さらにはこういったハード面だけではなく、住民参加のまちづくりなどのソフト面に至るまで都市デザインに含めることもできる。近年その幅はさらに大きく広がりつつあるが、本論文で言う都市デザインとは、都市を総合的に捉え構想し、さらに全体のシステムという大きな段階を踏まえながらそれをどう空間に反映させるかである。

都市デザインは建築物のように完成や竣工といった構想・計画の一応の区切りや終わりがあるわけではない。もちろん建築も使われていく過程も建築であるという立場からは見れば、竣工が建築の終わりではないのであるが、建築の構想はその一応の完成をみる。一方、都市デザインにはそのような区切りといったものはない。都市を構想し、そこで描いた都市像へむかって長年にわたって実現していくのである。そのように都市デザインをと

らえると、計画されたものが単体の建築であっても、その長期にわたるその広い視野をもっているなら、それは都市デザインといえることができる。

「都市デザインの表現」とは

「建築表現」と言った場合、主に完成した建築物に現れる造形的意匠的表現のことを指す。そこには設計者の設計意図が含まれている。だが、それを都市レベルにまで広げ「都市表現」といった場合、都市をどのように捉え、可視化しているのかというふうに捉えられるのではないだろうか。そこには将来像としてどのように都市をつくっていくのかという部分は少ない。それはもちろん、都市は一人のプランナーやデザイナーが作れるものではないということも表しているとも言える。都市は様々な人の様々な思いをくみ取り、計画・設計するものである。しかし、そこにも統一の考え方を表した将来像が必要である。そこで、本論文では「都市デザインの表現」という言葉を使い、「都市をどのように構想していくかを表している表現」と定義する。

「都市デザインの表現」の現れる場

都市という大きなシステムを踏まえてその上でどのような空間を創って行くのが都市デザインであると考えられる立場から、本論では建築ジャーナリズムの「新建築」誌（1946年～2001年）を対象資料として都市デザインの表現を見ていく。

雑誌を対象とする理由

本論では、事業報告書や行政で作成する計画図ではなく、新建築という雑誌メディアを対象とする。それは次のような理由からである。1. 内容を伝達するメディアとして歴史的にも大きな影響力を持っており、自由で活発な表現領域である。また、2. 雑誌は計画家・雑誌編集者・読者の要望という様々な人々の合意の上で成り立っている。3. そのことで記録性があり、時代性が現れる。以上のような点において雑誌を取り上げることが表現の系譜をみていく上で重要である。

新建築を取り上げる理由

また、都市デザインの表現を見ていく上で次のような条件が必要である。1. 空間を創ることが都市デザインであるという前提のもと、制度や文化的側面を中心に扱うものでもなく、物理的な空間を扱うメディアであること。2. 本論は日本の都市を対象としているため、日本国内の計画案・作品、日本人による構想を取り上げる雑誌であること。3. 本論は戦後～現在までの表現手法を俯瞰的に見ることを目的としているため、戦後～現在まで続いていること。4. 言葉による論述表現を中心としたものではなく、図版を多く載せているものであること。5. 当時の最新の作品/計画案を取り扱うメディアであること（時代記録的な側面がある）。6. 十分成熟した表現の場であること（建築ジャーナリズムは自由で活発な表現領域である）。以上の条件が必要である。この条件を満たすものとして、建築ジャーナリズムの代表的な雑誌として「新建築」誌が最適であると考えられる。

「新建築」誌という限られた資料の中であるので、「都市デザインの表現」すべてを取り扱っているとは言えない。しかし、このような都市デザイン表現の研究を続けていく手がかりの一つとなりえるし、そこから都市デザインの新たな地平が開けるのではないかと考えている。

1-2. 本論文の位置づけ

都市デザイン論 / 都市プロジェクト論

都市デザインの系譜に関する研究・文献は、多くみられる。通史的に古代から現代までの特徴ある事例を取り上げ、論じたものである。それらにおいて扱われている中心は新都市建設に関するものである。また、都市プロジェクトの系譜としてもいくつか雑誌等で特集が組まれ、通史的にまとめられている。これは都市プロジェクトという括りであり、その対象は建築家による架空構想や大規模再開発のみを対象としたものであり、近年の広く解釈された都市デザインを扱うものではない。現代の都市デザインの系譜についての研究は少ない。それは都市デザインという対象のあいまいさに起因すると思われる。これは都市デザインが未だに確立されているとは言い難いことを示している。都市デザインは一括りにできないほど広い。

新建築に関する既往研究

また雑誌「新建築」を対象とした研究はいくつかある。新建築に掲載された建築作品を対象としてその評価を行うもの、論考を対象に言語概念の展開を明らかにするものなどがあるが、奥山らの「新建築」誌を対象とした一連の研究は、建築家の表現の一つとして言説を位置づけることを目的に、新建築の巻頭論文を収集し、それらをKJ法によりカテゴリー分けすることで、どのような時代にどのような事がテーマとして語られたのかを分析している。このように新建築を代表的な建築ジャーナリズムとしてその作品・論文を対象に研究を進める方法はいくつか見いだせる。しかし、建築の分野においても、新建築誌上に現れた図版、図表現に関する研究はない。

そこで、本論文は、総体的に論じがたい都市デザインに「表現」という視点を導入することで、都市デザインの一側面をあぶり出そうとするものである。また、新建築研究という観点からは、奥山らの研究が言説を建築家の表現の一つとして位置づけるものであるのに対し、図表現を都市デザインの表現の一つとして位置づけるものであるとも言える。

2. 新建築について

ここでは「新建築」誌の概要、及び本論の対象とする1946年～2001年に掲載された計画案・作品全体を俯瞰することで時代背景を探る。またそのことで、対象資料の内容的变化についての補足・補正を行う。

2-1. 「新建築」誌の概要

「新建築」は月刊の建築専門雑誌であり、その名の通り毎月新しい建築を取り上げる雑誌として、建築界の流れを記録するという役割を果たしてきた。創刊は大正十四年(1925年)八月であり、大阪市で刊行され、昭和五年七月東京に本拠を移した。終戦時の社会混乱での中一年休刊となったが、その年を除き現在(2001年)まで刊行を続けている。

2-2. 新建築に掲載された計画の年代ごとの概略

一九四〇年代： 戦後の新建築復刊後、46年には帝都復興計画・大阪市復興計画等の広域な範囲での計画が掲載されており、緑地や交通網などを塗るものや、ゾーニング図がほとんどあり、そこに立体的な表現はほとんど現れない。わずかに西山卯三の研究論文の住宅建設の方法に関するパース等があるのみである。しかし47年

になると、東京の文教地区（神田・早稲田・大岡山・本郷・上野・第二次早稲田）の広域の計画が発表される。この頃には計画案が主で、作品はほとんど発表されていない。論考としては戦災復興、住宅供給に関するものがほとんどである。

一九五〇年代： 50年代に入り、それまでのような「東京」や「文教地区」という広域な範囲の計画は少なくなり、交通施設などのより規模の小さい計画が増える。また計画案や研究成果にかわり作品が多く発表されはじめている。また超高層建築についての議論も活発に行われている。50年代後半になると団地や学校の計画が多く発表されるようになる。59年頃には都市像形成の原像として彫刻など抽象的な表現と都市とのアナロジーが論じられている。

一九六〇年代： 60年代に入ると、東京計画 1960、ピアシティ計画などの建築家による架空の都市構想、また広域の保全計画案（史都計画、奈良計画など）の発表、万博への提案（大林組設計部、京大川崎研）など、50年代とは対照的に都市的レベルの大規模なプロジェクトが発表される。それと平行して学校や交通施設、住宅地（千里NT、坂出市人工土地）などの竣工作品も発表されている。60年代終わりに新建築住宅設計競技が始まり、その後架空の計画案で競い合うアイデアコンペが増え始め、誌上でも多く掲載される。

一九七〇年代： 70年代には、計画案の発表が少なくなる。逆に建築単位の作品が多く掲載されるようになる。大規模なものへの不信感とでもいったものも感じられる。六〇年代の大規模な開発や都市改造への反動から、環境についての議論が活発になる。さらに七〇年代の後半になると保存に関する議論が活発になる。

一九八〇年代： 80年代後半になると実施予定の計画案の発表が多くなる。また実施設計競技の結果が多く掲載されるようになる。イベントとして大規模な博覧会についての記事が多い（註 2-4）。論考においてはポストモダニズムに関する議論が活発になる。

一九九〇年代： 90年代に入り、引き続き実施設計競技の結果が多く発表されるなど、建築家の実施予定の計画案が掲載されている。論考ではプログラム論やバブル崩壊以後の建築界について多く、90年代後半にはコンピューター技術、阪神大震災とその復興に関して多くの議論が成されている。

2-3.まとめ

新建築においては、記事の分類として、40・60・80-90年代は「計画案」が多く発表されており、その他の時期は「作品」の発表が多い。また、計画案や作品の敷地規模は、40・60・80・90年代は大規模なものが多く、50・70年代は小規模のものが多い。大規模のものと小規模なもの交互に多く現れていることが明らかになった。

3. 都市デザインの表現の考え方

ここでは、具体的に新建築誌のなかに現れた都市デザインの表現の考え方の整理を行う。

3-1.対象とした資料について

まず、1946年から2001年までの全ての「新建築」の中で計画のコンセプト等を示す図表現を載せている計画案・作品を抽出した。

3-2.表現要素の抽出

抽出した計画で使われている図表現の表現手法を分類し、それらを次の4つの考え方で整理する。本論で対象としている資料は、建築を中心に扱うものであるため、建築を中心に整理する。

周辺環境としての都市

まず建築をとりまく周辺環境として都市を捉えると、まず一つ目の考え方：「周辺環境としての都市をデザインする表現」が得られる。簡略化し模式的に表すと図のようになる。これは計画対象の周辺の描き方をみる。

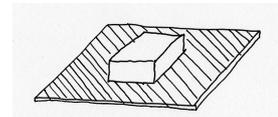


図2 周辺環境としての都市

都市に建つ建築

次にその見方とは反対に、都市のなかに建築はあり、建築を都市の一つの要素としてとらえるという視点から考えると、建築をどのように都につなげて行くのかという考え方：「建築からの都市へのつながりとしての都市デザインの表現」が得られる。模式的に示したのが図である。これは建築物自体の表現から都市へのひろがりを見る。

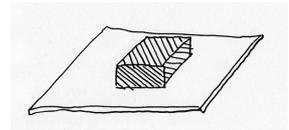


図3 都市に建つ建築

公共空間としての都市

次に、私的空間/公的空間という考え方から、私的な領域をデザインする建築デザインという視点に対して、公的な空間をデザインすることが都市デザインであるという考え方：「公共空間としての都市をデザインする表現」が得られる。敷地周辺街路、中庭、敷地内通路等がこれにあたる。これは一概に模式化できないが、やや強引に模式化すると、図のようになる。

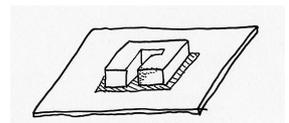


図4 公共空間としての都市

変動要素・概念要素

さらに、土地や建築が変動しないものであるのに対して、人や光など常に変動している要素を際立たせて描くこと、また、大きな都市軸や法的規制線など目に見えない概念的なものを描くものをここに含め、4つ目の考え方：「変動するもの等の表現」とする。

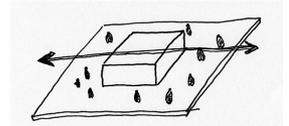


図5 変動する要素

4. 都市デザイン表現の分析

このように4点の大きな視点から分類しそれぞれ具体的な事例をもとに考察を行う。

4-1.周辺環境としての都市

建築を計画するとき、周辺環境としての都市をどのように描くのかという視点からとらえた表現である。これは、計画した建築物の周辺がどのように描かれているかという考え方もできるが、それと対照的に計画した建物をどのような環境に置くのかという考え方もできる。

そこで、ここでは二つの考え方でその読み取り方を見ていきたい。まず、前者として周辺環境を写真に撮り、その上から計画する建築物を重ねる「モニタージュ表現」、また後者として、計画した建物の周辺環境を描き込んでいる「フレーム表現」、「歴史的環境」、「広域鳥瞰

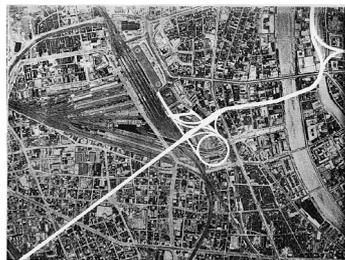
パス」について見ていく。

モニタージュ表現

モニタージュとは、航空写真の上から重ねて交通施設の敷設予定線や道路計画線を引いたり、像を重ねて描くことにより将来の都市の姿を表現する手法である。この表現はまず、一九五〇年代後半から一九六〇年代初めまでに集中して現れている。60年代に現れたものは次の通り。

掲載年月	計画名	設計者/計画者
1954.1	広島計画 1946-1953	丹下健三・浅田孝・大谷幸夫
1959.8	オリンピック東京大会スポーツ施設計画	建設省関東地方建設局
1959.9	大阪駅周辺の立体交差による高速道路計画	秀島乾
1960.7	新幹線大阪ターミナルの構想について	山崎克
1960.8	畿ヶ原中央部序計画について	横山正彦ほか
1961.3	東京計画 1950	カト研究室
1962.3	室島再開発計画	梅文彦、竹中工務店
1963.2	上六丁寺町地区改造計画	日本住宅公団大阪支所
1963.2	大阪駅市街地改造計画	大阪市計画局

これは、五〇年代後半から六〇年代前半という全国各地で盛んに都市改造が進められた時期と重なるものであり、都市を改造し新しいものへと変えていく際の、都市ビジョンの描き方を直截に表していると考えられる。ここで見られたモニタージュ表現のほとんどが航空写真之上から白い色で重ねて描かれた手法である。現在ある都市を補強するかのよう、上から重ねて新たに作るという開発イメージを示している。



大阪駅周辺の立体交差による高速道路計画(秀島乾)1959.9

この表現は、六〇年代前半以後全く現れなくなる。しかし、八〇年代後半から九〇年代に入ると再び突然多く見られるようになる。

1986.7	東京都新都庁舎指名設計競技結果発表	丹下健三都市建築設計研究所案
1987.7	認知革新文化会館(仮)設計競技結果発表	進藤繁(大成建設)
1988.8	まちづくりプロジェクト松崎から気仙沼へ	石山修武
1989.4	新梅田シティ開発計画プロポーザルプラン	原広司+アトリエ 建築研究所
1989.8	クリスタルタワー	竹中工務店
1989.9	中之島プロジェクト	安藤忠雄建築研究所
1991.2	大阪東家海上ビルディング	鹿島建設
1995.1	臨海副都心-東京テレポータウン	東京都

八〇年代後半から九〇年代に現れるこのモニタージュ表現の特徴は、次の二点である。まず、六〇年代のモニタージュ表現が真上からの航空写真をつかっていたことが多いのに対して、アイレベルや鳥瞰でも真上からの視点ではなく、少し斜めの方向からの写真に重ねて描いていること。二つ目に、ほぼ背景の写真に同化させるように詳細に描くこと。ここにはコンピューター技術の影響も当然の事ながら考えられるが、時期的にはバブル経済の盛り上がりで進む都市改造と重なる。また、コンピューターのような新しい技術とともに新たな世紀へ向けて、現実の都市に重ねて新しい建築や都市を構想していこうとする意志が読みとれる。

広域を鳥瞰的に見る表現

計画対象の敷地を含め全体を俯瞰するパス。40年代、戦後の文教地区計画で描かれているが、その後ほとんど描かれず、80年代半ばから多く描かれる。'84.10 みなとみらい 21(横浜市) '89.5 横浜博覧会、'92.9 天王洲地区開発(RIA ほか) '95.1 臨海副都心-東京テレポータウン(東京都)などは、博覧会とい

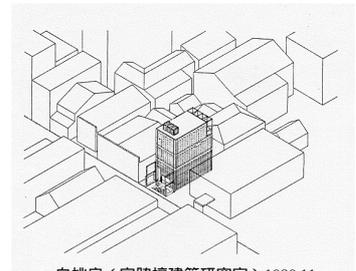


臨海副都心-東京テレポータウン(東京都)1995.1

う性質もあってか陽気であり、お祭り騒ぎと一緒に都市をつくってしまおうとしているかのようである。一つ一つの建物は小さく、ディテールは描かれずおもちゃの積み木のようなものである。

フレーム表現

周辺の建物をフレームとしてその外枠のみを描く表現手法である。これは、周辺の建物を考慮しながら、対象の建築物を際立たせるものである。以下の通り。



白桃房(宮脇建築研究室)1989.11

1970.7	二番館	竹山東建築総合研究所
1977.2	BOX-A QUARTER CIRCLE	宮脇建築研究室
1983.5	東京大学総合研究資料館新館	香山アトリエ/環境造形研究所
1986.1	SPIRAL	横塚合計画事務所
1989.11	白桃房	宮脇建築研究室

歴史的環境における表現

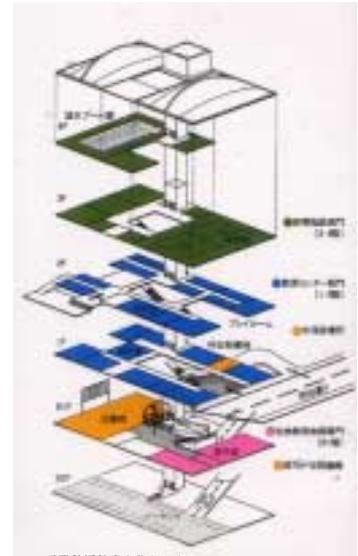
周辺環境として伝統的日本家屋群などがある場合、その周辺環境の様子を屋根伏で表現することが多い。'85.11 足助文化センター(浦辺建築事務所ほか) '88.6 小樽運河工芸館(倉本たつひこ建築計画室)などである。

4-2. 建築表現による都市デザイン

次に建築物を計画したときにその建築を如何に都市につなげているのかという視点からみる。これには、「レイヤー表現」、「地階アクソノメ表現」、「断面パス」がある。

レイヤー表現

レイヤー表現とは、建築物の各階高レベルを分離し表現するものである。これは七〇年半ばに菊竹清訓建築設計事務所作品に現れるなど、ごく希に使われているが、その後八〇年代後半頃から突如として多く描かれるようになる。その後九〇年代半ば頃までよく描かれているが、その後少なくなる。この表現は、建物要素をいくつもの要素に分け、縦方向に分離し表現するもので、上下方向のつながりを表現するものである。



千登勢橋教育文化センター(菊竹清訓建築設計事務所)1987.11

1954.4	国立科学博物館	谷口吉郎
1956.5	関東労災病院計画	建設省関東地方建設局管轄部
1975.10	救市庁舎	菊竹清訓建築設計事務所
1979.7	斜面建築の計画	菊竹清訓建築設計事務所
1987.6	銀座テアトルビル	菊竹清訓建築設計事務所
1987.6	141.エルパーク仙台	ダムタン空間事務所
1987.11	千登勢橋教育文化センター	菊竹清訓建築設計事務所
1990.5	古河市ビクターセンター	早川邦彦建築研究所
1992.2	大阪 K 計画	八東はじめ
1995.1	恵比寿カーテンプレイス	久米設計

レイヤー表現は、単体の建築物で一つの要素が完結するのではなく、建築物の中にレベルごといくつもの用途や要素や空間を内包することを示すことができる。基本的には建築物の上下の関係、つまり都市の重層性(上昇性)を示していると考えられる。この上昇性は都市を垂直方向へと増殖させていこうとする意識が読みとれ

る。

また、1997 年以後にこれと類似した手法で描かれているものがある。

1997.10	麻布大学キャンパス MS 指名設計競技案	ナンシー・フィンレイほか
1999.6	大塚府宮景大津なぎさ団地	大塚府ほか
1999.8	小鮎ネーム刺繍店	石田敏明ほか
2001.8	つづくしま茶茶博覧のネイチャーツアー	アーツ&クラフツ建築研究所

しかし、これらはそれまでのレイヤー表現とは異なる。分離して表現する各要素が階高ごとではなく、平屋や低層の建物において地盤・植栽・架構などの地盤面にある要素を分解して表現しているのである。これは何層にも重ねていくというのではなく、都市や敷地の要素の密度を高めていくと言えよう。小鮎ネーム刺繍店（石田敏明ほか）ではレイヤー表現として上下方向ではなくファサード面の構成要素を水平方向に分離し表現している。上下方向から横方向へ。それは、建築の内容の重層化という問題ではなく、建物と前面道路という公共空間との関係という問題へと変化している。

地階アクソノメ表現

地階より上部の建物を省略し地階部分のみを描くアクソノメで表現である。

1975.9	沖縄国際海洋博覧会水族館	横総合計画事務所
1976.1	宮崎県総合青少年センター-青少年自然の家	坂倉建築研究所
1976.1	黒石ほるふ子子ども館	菊竹清訓建築設計事務所
1981.11	軽井沢・高輪美術館	菊竹清訓建築設計事務所
1982.1	松陰女子学院大学・短期大学	竹中工務店
1983.9	宮代町立笠原小学校	象設計集団
1983.12	土門学記念館	谷口建築設計事務所
1983.12	とくわの家書簡	アトリエ・モビル
1986.10	藤町立図書館	神戸大学建築研究室
1986.12	桐蔭学園幼稚園・小学校・中学校	丹下健三ほか
1987.7	早稲田大学所沢キャンパス	池原研究室
1991.10	唐津ゴルフ倶楽部	葉デザイン事務所
1995.1	サウンド美術館演習館	横総合計画事務所
1999.8	サウンドミュージアム「かわもと音戯館」	新居千秋都市建築設計

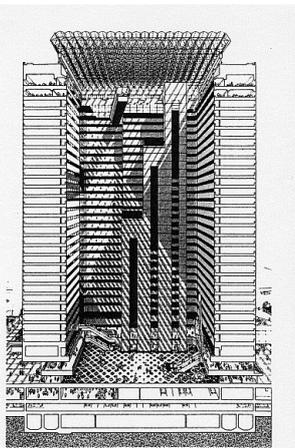
この表現は、建築の一階レベルと外部の広場とのつながりを強調して示すものであり、建築をつくるときにその一階部分から都市へと水平的に広げていくというものである。レイヤー表現が垂直方向に伸びていくのとは対照的に水平方向に都市を広げていこうとしているとも言える。



宮代町立笠原小学校（象設計集団）1983.9

断面パース

断面図に一点透視図法で建物内部を描く表現である。この表現は、内部の断面方向の関係が示せ、かつ内部空間と外部空間のつながりを示すことも可能である。また、実際には見えない視点からのものであり、自由な視点選びの可能性があるが、迫力ある図が多い。高層ビルや大規模な建築に多く用いられている一方で、個人住宅や低層の小学校にも多く用いられている。その両極の規模のものによく使われる表現である。この表現が多く使われたのは、七〇年代初め、及び八〇年代初めである。



新宿 NS ビル（日建設計）1982.12

1972.5	北九州ユースホステル	小川博建築設計事務所
1973.6	全国勤労青少年会館	日建設計

1974.8	富士見ヶ丘の家	武者英二研究室
1981.2	新建築会館 設計競技入選発表	木島安史
1982.3	日本ハブアースト教会連合センター	東孝光建築研究所
1982.8	歪でない方形の家	香島忠男
1982.12	新宿 NS ビル	日建設計
1984.3	江戸川区立清瀬第二小学校	工学院大学谷口宗彦
1984.3	S-2 街区 新宿ワシントンホテル 新宿二井ビル	坂倉建築研究所
1984.10	段々の家	野老設計事務所
1988.9	プロジェクト UIC	坂本一成研究室
2001.9	日本科学未来館	日建設計ほか

4-3. 公共空間としての都市をデザインする表現 通りを中心とした表現

公共空間の描き方として通りをメインとして描くものがある。まず、通りを中心に両側に建物をアクソノメとして立ち上げるもの。

1973.1	栃木県立美術館	川崎清・建築研究協会
1974.9	くすのき広場	横浜市
1983.1	一番町四丁目商店街 ショッピングモール	高橋志保彦建築設計事務所
1992.6	ヒルサイドテラス	横総合計画事務所
1999.11	富山国際会議場	横総合計画事務所

ヒルサイドテラスは横総合計画事務所による隣接する敷地での連作であり、初期の計画（'69,'73,'78,'80）ではその表現は通りの片側であったが、'92 において通りを挟んだ反対側に計画が広がったため、両側に表現している。また、栃木県立美術館では、対象敷地のから少し離れた所から対象敷地までの通りの片側をフレーム状にした表現で表している。

中庭を強調する表現

これは 2 種類に分けられる。

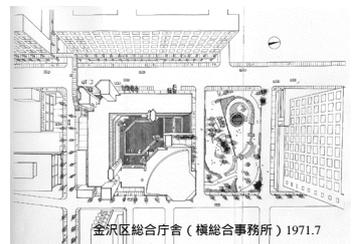
1971.9	石田医院	S.D.G アトリエ Nothig
1972.12	枚方紳士団地	竹内建築事務所
1985.5	ホテルサンガーデンらぽーと	香山アトリエ / 環境造形研究所・フジタ工業
1987.11	千登勢橋教育文化センター	菊竹清訓建築設計事務所

以上は、周辺の建物を省略しアクソノメで中庭のみを描くもの、または建築群に囲まれた中庭を濃く着色し強調して表現しているものである。

1971.7	金沢区総合庁舎	横総合計画事務所
1971.11	都市住宅の再構築	菊竹清訓建築設計事務所
1972.1	埼玉会館	前川国男建築設計事務所
1980.12	住吉スクエア	ハンテコ建築設計事務所

以上は、対象の中庭の真上からの一点透視で描くものである。

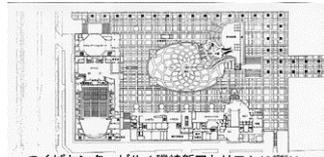
これら中庭の表現は環境についての議論が活発になった 70 年代前半に多く描かれており、環境への配慮として中庭が特に対象となっていたことがわかる。



金沢区総合庁舎（横総合事務所）1971.7

広場・舗装表現

舗装の模様をきつく強調して描く表現が 81 年から 85 年までに多くみられる。舗装の模様とその設計主旨が多く込められていた時代であると言える。



つくばセンタービル（磯崎新アトリエ）1983.11

建築内の公共的空間

集合住宅や商業ビルにおいて、住宅や店舗以外のパブリックな部分を強調するもの。

1972.5	北九州ユースホステル	小川博建築設計事務所
1973.1	トヨタ親ヶ丘記念館	横総合事務所
1981.6	花の北ホテル	RIA 建築総合研究所
1991.6	大塚府東大塚吉田住宅	大塚府建築部管理課
1998.6	名塩ニュータウン シェラピア東山台	住宅・都市整備公園関西支社ほか

4-4. 変動要素・概念要素を描く表現

変化する要素・概念的な要素を効果的に見せるために描き込んだもの。ここでは「光の射し込み」「点景としての人」「動線」「デフォルメ」「軸」を特に取り上げる。

断面図に「光」の射し込みを表現

まず光を描いているものを見てみると、平面図や配置図に建物の陰影を落とすという表現は戦後から現在までにおいて現れる一般的な手法である。しかし、断面図に

光を描くものは、八〇年から八四年までに集中して描かれている。

1980.5	STEP	安藤忠雄建築研究所
1981.11	軽井沢・高輪美術館	菊竹清訓建築設計事務所
1982.12	新宿NSビル	日建設計
1983.7	九条の町屋	安藤忠雄建築研究所
1984.5	東北三原谷アレイハウス	大阪府住宅供給公社建設部ほか
1984.6	高橋慶夫記念館 静思堂	宮脇隆建築研究所

NS ビルの表現はアトリウムという超高層オフィスビルの中に自然環境を取り入れるというものを示したものであり、九条の町屋は狭隘な敷地内での自然環境の取り入れ方を示した表現である。ちなみに、軽井沢高輪美術館は陰影ではなく、矢印で表現している。このように、光という自然環境と調和し建築内に取り入れることを示しており、そこには都市へ開くというよりも都市から閉ざし、その建築内の中で自然環境を充実することを強調している。

点景としての人の表現

建築写真や人という要素は時には邪魔な存在となる。しかし、人を特に多く描くようになるのが、95 年以後である。ちなみにこの時期に発表されている計画の模型にも同様に多くの人が置かれている。

動線

車の動線を矢印で描く表現が 60 年代を中心に多く見られる。

デフォルメ表現

点景、特に人をデフォルメして表現するものであり、90 年代半ば以降に多い。

大きな軸

大きな都市のなかでの軸を示すものである。建築は環境の中に置かれており、周辺環境の何らかの概念的な軸を中心に計画されているものがある。そのような軸を計

画図や概念図において明確に示しているものは次のとおりである。

1980.10	警視庁本部庁舎	岡田新一
1983.9	宮代町立笠原小学校	家設計集団
1985.8	小国町計画(1984-1989)	葉祥栄
1991.10	大帯ランド展望塔	葉祥栄事務所
1993.10	大帯ビジターセンター+サービスハウス	吉谷謙雄ほか
2001.12	国立オリンピック記念青少年総合センター	国土交通省ほか

5. まとめと考察

新建築に見られる都市デザインの表現を手法ごとに時系列でまとめる。それらを建物用途（個人住宅・集合住宅・商業業務・公共文化施設・都市計画/都市開発）により分類した。（図 6 参照）

まず、全体としては次のような点が明らかになった。

1. 都市デザインの表現として様々な手法があり、近年のほうがより多様化していること。
2. 表現によって全年代に満遍なく描かれるものと、時代に偏りがあるものがあること。
3. 戦後から 70 年代前半まで、公共・文化施設において都市への配慮が多く見られ、それが近年では都市への配慮が集合住宅や商業業務施設などにおいても展開され、都市デザインの表現での広がりを見せていること。
4. 以上のように表現手法から時代性を読みとることができること。

表現は良くも悪くも都市を未来へと導く。ただ表現のみに頼る事は危険である。都市デザインの表現は、あくまでフィールドを基本にし、美しい都市をつくるための構想への手段としてあるべきである。しかし、表現にこそ今後の都市ビジョンへ向けての可能性が見える。そこからの都市デザインを目指したい。

主な参考文献：「新建築」新建築社 1946-2001 各号

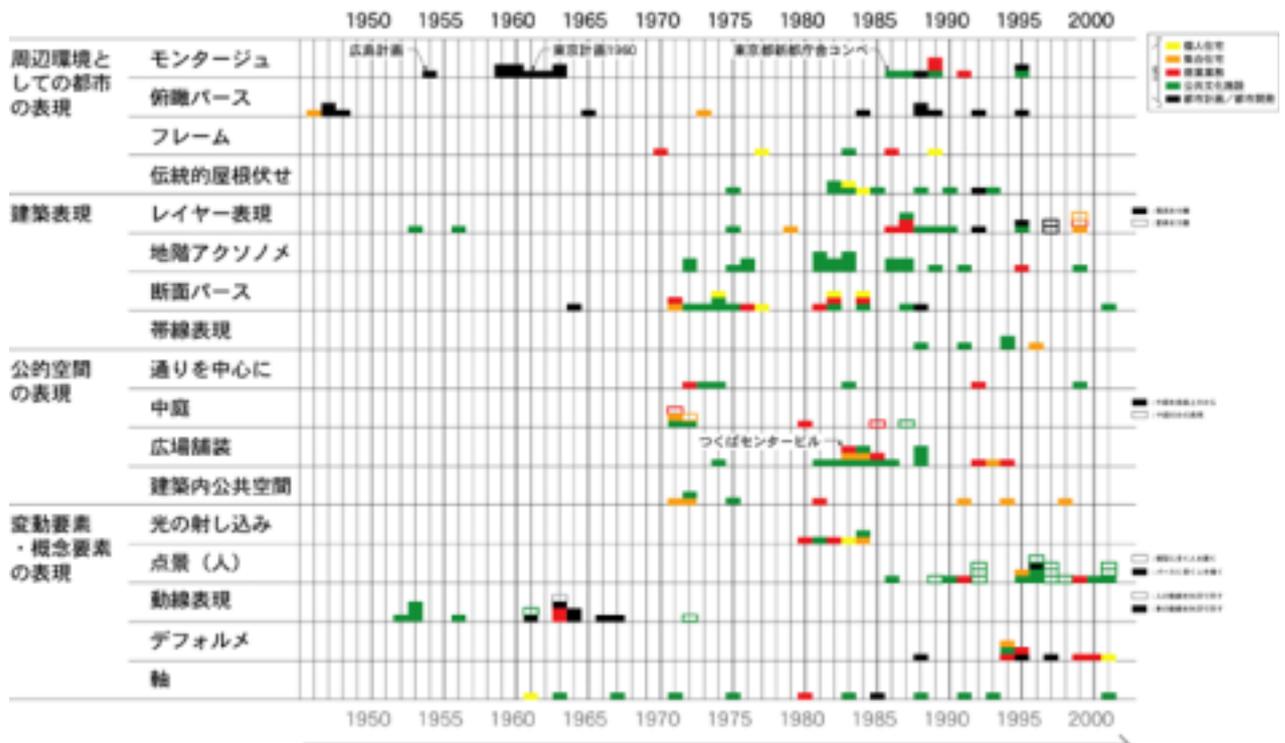


図 6：都市デザイン表現の時系列整理